

貝野村



五代目

笑福亭 松鶴

エ、一席伺ひます。處は大坂船場、大きなお商人で、奉公人をば二十人ばかり使ふて、お店はドン／＼と繁昌して行く、此所の家の御主人といふと、親旦那と若旦那のお二人限りで、この若旦那、お年は二十二、男前が實に宜しいので、世間ではこの人の事を今業平といふ名前を付けて居る位ひ、之れで商賣の掛引が上手い、つまり萬事に如才がないものですから、世間で評判の若旦那、スルと此所のお家へ差して、大工の棟梁が世話をして、丹波の貝野村から女中を一人連れて参りました。これが山の中から連れて来たものですが、却々の別嬪さんで、年は十八、名前がおもよさん、丈がスラリと高ふて、色がクツキリ白ふて、鼻がツーンと高い、鼻筋がシュツと通つて居て、眉毛に愛嬌がありま、す、三月月眉毛、兩方を合すと六日月眉毛、目が二夕皮目、ニコツと笑ふと笑窪がゴボツと這入る、お女中の笑窪は深い程價值があるのやさうで、おもよさんの笑窪は印籠笑窪、蚊死なん笑窪といふのだ

す、これは何んでやと云へば、笑窪へ指を突込んで抜くと、ボンと音がします、それで印籠笑窪、蚊が留つて、ビシヤリと叩いても蚊が死ません、蚊死なん笑窪といふ、口元が可愛い、おちよぼ口と云ふのは世間に澤山ありますが、おもよさんのは、御飯粒が横には這入らん、縦にして、金槌で叩き込まねばならんといふ、誠に可愛い口、齒列びは美やかで頸筋が綺麗で、皆揃ふて居りますが、けどもまアお女中の持前で、お髻が少し大きい筈なのですが、このおもよさんのお髻はこれは又實に可愛らしい、お髻があるかないか知れませんが、小さいおいでで、實に恰形の宜しい事で、この女中が参りますと云ふと、世間の人々が皆今小町といふ名前を付けてまして、餘り綺麗なものだすよつて、このお家でも上の女中を勤めて居るが、始終まア若旦那の傍に付切りといふので、若旦那の御用を始終承つて、待いて居りますが、前にも申しました通り、若旦那が今業平、女中の方が今小町、此所に業平に小町とが衝突して居ります。これが普通の人間ならば、直に變な關係が持上りますが、そこは兩人共いたつて温順しいので、人の口の端に掛るやうな事はちよつともありません、併し兩人共心の中は充分に想ふて居るには相違ござりません。スルとこの若旦那が、商賣用の、取引やら、掛取やらで、店の若い者を連れて、一ヶ月程、九州へ旅行を致しました、若旦那が御出立になりました、二十五日目の日に、丹波の貝野村から、使が來まして、おもよさんの母親が病氣で、是非おもよを呼戻して看病して欲しいといふ事でござります、使の者から、どうか、おもよにお暇を下さるやうに、